

## 研究ノート

# 体系化された教育プログラムの開発に向けた取り組み —初年次教育における課題—

○岡田美穂\*1 横山順一\*1 岡野亮介\*1 廣瀬春次\*1 古根川円\*1 金子壽一\*1

キーワード：アカデミックスキルズ、大学初年次教育、日本語力、「基礎ゼミ」

### 1 本研究の目的

至誠館大学（以下、本学）では、必修科目である「基礎ゼミⅠ」、「基礎ゼミⅡ」、「基礎ゼミⅢ」、「基礎ゼミⅣ」（以下、「基礎ゼミ」）においてアカデミックスキルズ<sup>註1</sup>の習得を目的とした教育を行っている。アカデミックスキルズとは先行研究を批判的に読むスキル、論文を書くスキルといった「大学で学ぶための基礎的技法」のことであり、教養そのものではなく、大学生がこれから一生かけて築いていく幅広く深い教養を積み上げるための基礎となるものである（佐藤ほか2012）<sup>7)</sup>。また先行研究を批判的に読むためには研究の内容を正確につかむ力、論文を書くためには論文にふさわしい表現を用いる力といった日本語力が備わっていないといけない。すなわち、初年次の学生には十分な日本語力が備わっていることが前提となる。日本語力はアカデミックスキルズの習得を目的とした教育のみならず学問のあらゆる分野に共通する基礎力であり、社会に出てからも日本語力の有無が成敗の結果を左右するとも考えられる（柏木2016）<sup>2)</sup>。

これまで本学の「基礎ゼミ」は授業を担当する個々の教員の裁量に任せられてきた。そのため全体としての体系化された教育プログラムはまだ確立されていない。初年次教育として位置づけられている「基礎ゼミⅠ」と「基礎ゼミⅡ」においては2018（平成30）年度に共通の到達目標及び学習項目を設定した学習計画に基づく教育の実施を試みたところ、本学の学生には日本語力を強化する段階を盛り込む必要性が感じられた。

そこで本研究は、「基礎ゼミ」における体系化された

教育プログラムを開発するにあたり、アカデミックスキルズ習得の前段階として、本学初年次の学生が強化すべき日本語力とはどのようなものかを明らかにすることを目的として行った。

### 2 アカデミックスキルズ習得の前提となる日本語力

現在、「基礎ゼミ」では『キャリア・プランニング 大学初年次からのキャリアワークブック』がテキストとして用いられている。これは大学で学問を行う者にとって最低限必要なアカデミックスキルズ（佐藤ほか2012）<sup>7)</sup>を身につけるためのワークブックである。講義のノートを取る、クリティカルリーディング（批判的読解）の手法を用いて批判的に本を読む、図書館とデータベースを利用した情報を収集する、プレゼンテーションを行う、論文・レポートを書く（石上・中島2016）<sup>1)</sup>といった練習を通してアカデミックスキルズを身につけるのである。以下、大学初年次の学生に備わっていないといけない日本語力についてみていく。

野矢（1980）<sup>10)</sup>によれば、大学初年次の論理トレーニングの1つとして接続関係の重要性が述べられている。「論理」とは言葉が相互にもつ関連性であり、「論理的になる」とは関連性に敏感になり言葉を大きなまとまりで見通す力を身につけることにほかならないという。接続関係の明確な文章を正確に理解し、自分でもそのような表現を作れるようにならなければならないのである。接続関係は順接の接続構造と逆接の接続構造が示されている。適切な接続関係を示すための訓練はプレゼンテーションや論文として研究を発表するためにも欠かせないものであろう。

\*1 至誠館大学 ライフデザイン学部

齋藤（2003）<sup>9)</sup>では、実践的に必要な真の日本語力を身につけることの重要性が述べられている。真の日本語力とは要約力、主語と述語のねじれのこない文を作るための基本構文力、文章を図式化し図を文章化する力などを指している。要約力は日本語力の中心に捉えられている。要約は客観的なものであり、的確な要約力がなければ何かを批判するときにも外的な批判になってしまうからであるという。先行研究を批判的に読むクリティカルリーディングを行う際にも客観的で的確な要約を要する。

松浦（2017）<sup>10)</sup>では、言語表現力及びコミュニケーション力を養うための新聞記事の要約の方法や文章表現の基本などが示されている。文章表現の基本は文末を統一すること、話し言葉を混ぜて書かないこと、文のねじれが起きにくくするため1文をできるだけ短くすること、分からない漢字は国語辞典や漢和辞典をひいて確認することなどが詳細に示されている。話し言葉とは日常の会話に用いる言葉である（新村出編1976）<sup>9)</sup>。話し言葉は書き言葉に比べ、文の順序が正常でない場合があること、同じ文や言葉を繰り返すことがあること、言いさしで文を終わることがあること、文の成分の一部を省略することがあることといった特徴が挙げられる（日本語教育学会編1982）<sup>9)</sup>。

アカデミックスキルズを習得する大学初年次の学生には上記のような日本語力が備わっていなければならないであろうと考える。では本学初年次の学生においてはどのような日本語力を強化すべきなのだろうか。

### 3 研究の方法

本学初年次の学生が強化すべき日本語力を調べるためには、初年次の学生12人が2018年前期の「基礎ゼミⅠ」の内2回の授業で書いた文章を分析の対象とした。文章はNHKの約20分の番組の内容が400字程度に要約されたものである。学生が要約にかけた時間は約1時間であった。番組のタイトルはa.「ことば以外の表現」<sup>3)</sup>とb.「ことばに変える」<sup>4)</sup>である。以下、表-1にa、表-2にbの内容を要約するためのポイントを

示しておく。日本語力は表-3の①～⑬の点について調べた。

表-1. a「ことば以外の表現」要約のポイント

- 1). 非言語コミュニケーションについての番組である。伝え手が言葉を用いずに、「感情」や「ヨガのポーズ」を、受け手に伝えることができるか否かを調べるために2つの実験が行われた。
- 2). 実験1は伝え手が「目」を使って「嬉しい」「悲しい」といった感情を受け手に伝えるものであった。
- 3). 実験2は伝え手が「身ぶり手ぶり」を使って「ヨガのポーズ」を受け手に伝えるものであった。
- 4). 実験の結果、目で感情を伝えることはできたが、身ぶりでポーズを伝えることはできなかった。
- 5). 非言語コミュニケーションは文化との関わりもある。落語では扇子と手ぬぐいを用いて、言葉、視線、身ぶりによって話を伝えるという例、習慣や約束事として伝わる身ぶりの例、服装や化粧などが表現に影響を与える例が挙げられた。

表-2. b「ことばに変える」要約のポイント

- 6). 役に立つメモの取り方についての番組である。メモの基本は「視写」と「聴写」であった。「視写」とは書かれた通りに正確に書き写すことであり、「聴写」とは聞いた通りに書き取ることであった。
- 7). ポイントは「視写」では文章を正しく理解することであり、「聴写」ではスピードを優先し意味のまとまりで聞き取り、書き取ったものを清書することであった。6人が「聴写」に挑戦した。
- 8). メモの目的と種類には記録、理解、伝達、表現の4つがあった。
- 9). 伝達メモの実践とポイントは5W1Hを用いること、情報を取捨選択し整理することなどであった。
- 10). 身近な物を言葉で表現する場面ではNHKキャラクターの「どーもくん」を表現する難しさが示された。言葉のプロに話を聞く場面では「心を白紙にした時、詩が生まれる」という谷川俊太郎の話があった。

表-3. 学生の書いた要約を調べるポイント：文章表現に関わる①～⑩と要約力に関わる⑪～⑬

①	「ねじれ」：主語（主題）の成分と述語の成分がねじれている文がないか。	例1：夢はプロの選手になる。（「夢は」が「選手になる」と呼応しておらず、ねじれている。）
②	「接続詞」：先行する文と後続する文の関係が適切に表されていない接続詞がないか。	例2：家の南側にビルが建った。そこで、日当たりが悪くなった。
③	「話し言葉」：話しことばが用いられている箇所がないか。	例3：感情 <u>って何だろうって</u> 考えた。
④	「文末」：「です・ます体」が用いられている文末、名詞や形式名詞などの体言が用いられている文末がないか。	例4：彼女は来月ロンドンで <u>発表します</u> 。 例5：多くの課題があるという <u>こと</u> 。
⑤	「漢字」：正しい漢字が用いられていない箇所、漢字で書くべき語に平仮名が用いられている箇所がないか。	例6： <u>不様な</u> 情報である。 例7： <u>ききもらし</u> がないようにする。
⑥	「助詞」：助詞が省略されている箇所、適切な助詞が用いられていない箇所がないか。	例8：9月10日、 <u>決定した</u> 。（助詞を省かずに「9月10日に」としたほうが良い）
⑦	「省略」：読み手にとって必要だと思われる情報が省略されている箇所がないか。	例9：練習では1人が情報を与えそれをメモした。（「それをメモした」の前に「もう1人が」という読み手に必要な情報が省略されている）
⑧	「表現」：直したほうが良い表現がないか。	例10：視線は愛情表現や人をおどしたりする。
⑨	「不明」：意味がよく分からない箇所がないか。	例11： <u>思いは言葉にならずにまず始めに言葉がでてくる</u> 。
⑩	「その他」：表記の誤りがないか。同じ語が何度も使われていないか。	例12：聞いた <u>とうり</u> に書き写す。
⑪	番組の全体的な内容が書かれているか。	
⑫	番組の内容が客観的に示されていない箇所がないか。	
⑬	番組の内容と異なることが書かれている箇所がないか。	

表-3の①～⑩は文章表現に関わるものであり、⑪～⑬は要約に関わるものである。まず、学生の要約から①～⑩に該当する箇所を抽出した。次に、抽出した箇所を1点として①～⑨のそれぞれを合計した。また、①～⑩に該当するものを用いた学生の数も調べた。要約力については⑪～⑬の点を調べた。⑪は先に示した表-1と表-2を判定の基準とした。すなわち、学生の要約にはaでは表-1の1)～5)が、bでは表-2の6)～10)が

すべて書かれていれば「番組の全体的な内容が書かれている」としたのである。⑫「番組の内容が客観的に示されていない箇所」とは考えや感想など学生の主観が書かれていないかどうか、⑬「番組の内容と異なることが書かれている箇所」とは番組の内容が誤って理解されていないかどうかを調べるものである。以下、表-4には表-1を簡略化した要約のポイント、表-5には表-2を簡略化した要約のポイントを示す。

表-4. a「ことば以外の表現」簡略化した要約のポイント

- 1). 非言語コミュニケーションについての番組であることの説明。
- 2). 「目」を使った実験 1。
- 3). 「身ぶり手ぶり」を使った実験 2。
- 4). 実験の結果。
- 5). 非言語コミュニケーションと文化の関わり。

表-5. b「ことばに変える」簡略化した要約のポイント

- 6). 役に立つメモの取り方の番組であることの説明。
- 7). 「視写」と「聴写」のポイント。
- 8). 記録、理解、伝達、表現のためのメモ。
- 9). 伝達メモの実践とポイント。
- 10). 身近な物を言葉で表現する。言葉のプロに聞く。

なお、番組の要約を研究の対象とすることについては学生の同意を得た。学生に対し研究の目的と内容を説明した後、要約は、研究のためだけに用いること、個人が特定されないように配慮すること、「基礎ゼミ I」の授業の成績には関係しないこと等を述べた。

#### 4 結果

表-6 は学生 12 人の要約の中で①～⑨に該当するそれぞれの箇所を合計したものである。例えば①は表-3 に示した例 1「夢はプロの選手になる」のように主題とした成分と述語の成分がねじれている文を数えたもので、「ねじれ」が a の要約には 15 箇所、b の要約には 18 箇所見られたことを表している。

表-6. 学生が書いた a「ことば以外の表現」と b「ことばに変える」の要約に見られた①「ねじれ」・②「接続詞」・③「話し言葉」・④「文末」・⑤「漢字」・⑥「助詞」・

⑦「省略」・⑧「表現」・⑨「不明」の合計

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
a.	15	8	20	7	7	5	9	41	10
b.	18	8	13	6	5	13	14	34	6

n=12.

①～⑩に該当するとされたものの例は以下の通りである。以下の判定は執筆者 6 人が行った。問題の箇所には下線を施した。「～」は省略を示している。

#### ①「ねじれ」

(1) メモの目的は、記憶・伝達・表現・理解のためのメモをして取捨選択が大切だ。

(2) 視線では、愛情を表現したり、おどすこともできる表現力の豊かな要素である。

#### ②「接続詞」

(3) 情報を全て書くのではなく取捨しながら必要な部分を抜き取って書くことが必要である。したがって、メモを取る時、わかりやすく正確に書く方法は、いつ・どこで・だれが・だれをこの 4 つを重視して書くのが必要だ。

(4) 人は視線によって愛情も怒りも伝えられる。すなわち、「目は口ほどにものを言う」ということわざが重要である。

#### ③「話し言葉」

(5) ～表現しないといけない。

(6) なので、1 人目と 2 人目が目隠しをせずにヨガをやり、1 人目が身ぶりや手ぶりをしながら言葉～。

#### ④「文末」

(7) その実験は、視線を使って他の人に感情を伝えるというもの。

(8) ～ということです。

#### ⑤「漢字」

(9) ～しなんの技だ。

(10) ～価条書き～。

#### ⑥「助詞」

(11) しかし、自分が書いたことを分からなくなっ  
ては意味がないのだ。

(12) メモは人が話していることは聴き取りながら書かなければならない。

#### ⑦「省略」

(13) 結果「目は口以上にものを言う」となった。

(14) 身ぶりとは、言葉のかわり、具体的に伝えられる。

#### ⑧「表現」

(15) 番組のテーマは「ことばに変える」である。

まず、はじめに出たのはメモである。

(16)メモの取り方には様々な形があるので、～。

⑨「不明」

(17)そして、2人目の人が目隠しをして、ヨガを言葉だけを聞きヨガをする。

(18)コミュニケーションは、時代とともに変化していく。更にコミュニケーションとは一生必要なものである。

⑩「その他」

(19)聴写をする上で重要なことがいくつかある。まず、～。次に、書き取りの速さが重要である。～。伝達のメモで重要な点は、～。～どう表現するのかを想像して書くことが重要だ。

(20)～正確に書く事が大切である。一番大切な事は～。～。メモする事が大切である。メモを取った後は情報の大切なところだけを抜き取りまとめる事が大切である。

表-6から⑧「表現」、①「ねじれ」、③「話し言葉」、⑦「省略」の順に多いことが分かる。最も多かった⑧はaでは41箇所、bでは34箇所であった。(15)の「はじめに出たのはメモである」は「はじめはメモについて述べられた」といった表現が、(16)の「様々な形」は「さまざまな目的と種類がある」といった表現が望ましいだろう。③はaでは20箇所、bでは13箇所であった。(5)の「表現しないとイケない」は「表現しなければならぬ」、(6)の「なので、～ヨガをやり」は「そのため、～ヨガのポーズを取り」といった表現が望ましいであろう。⑧と③が多かったことから当該学生の表現力が十分でないこと、使用語彙の少ないことが推測される。また、(19)では「重要」が4箇所に、(20)では「大切」が5箇所に用いられている。当該学生の使用語彙も少ないと言える。

次に多く見られたのは①「ねじれ」であり、aでは15箇所、bでは18箇所であった。ねじれない文を書くためには構文を意識し(齋藤 2003)<sup>9)</sup>、1文をできるだけ短くすると良い(松浦 2017)<sup>10)</sup>。(1)の場合は1

文を短くし2文に分ければ良いのではないかと。例えば、「メモの目的は記憶・伝達・表現・理解のためである」、「メモをするときには取捨選択が大切である」と表現した方が良い。(2)も同様である。ねじれない文を書くために日本語の構文を意識し、1文の長さを短くするといった練習が必要であろう。

⑦「省略」は表-6よりaでは7箇所、bでは14箇所に見られたことが分かる。(13)は「結果、『目は口以上にものをいう』となった」であり、読み手に伝える情報が省略されている。「実験の結果、『目は口ほどにもものを言う』ということ、つまり、言葉がなくとも目で感情を伝えることができたのである」のように情報を加えなければ読み手に伝わらない。(14)も同様である。当該学生はどのような情報を省略してはならないのかを考えつつ文章を書くことに慣れる必要があると考えられる。⑨「不明」の文がaでは10箇所あることから文章を書くことに慣れていないことが推測される。(17)「そして、2人目の人が目隠しをして、ヨガを言葉だけを聞きヨガをする」の意味が分かりにくいのは、「2人目の人」とその他の2人との関係が示されていないからであろう。番組での実験は3人で行われた。1人目がヨガのポーズを取る。2人目は目隠しをしている。3人目が、1人目の取っているヨガのポーズを、口頭で2人目に伝え、2人目がそのポーズを取るというものであった。

表-7は要約に①～⑩を用いた学生数を表したものである。1人の学生が用いた①～⑩の頻度については考慮していない。

表-7. 要約に①「ねじれ」・②「接続詞」・③「話し言葉」・④「文末」・⑤「漢字」・⑥「助詞」・⑦「省略」・⑧「表現」・⑨「不明」・⑩「その他」を用いた学生数

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	⑩
a.	9	7	7	5	5	3	7	11	7	3
b.	8	5	8	3	2	6	6	12	3	4

n=12.

表-7より⑧「表現」、①「ねじれ」、③「話し言葉」、

⑦「省略」、②「接続詞」の順にそれらの見られた学生の多いことが分かる。特に⑧「表現」が見られたのは *a* では 11 人、*b* では 12 人とほぼ全員であることが分かる。このことから本学初年次の学生の強化すべき日本語力とは論文やレポートの文章にふさわしい表現を用いる力であると推測される。

要約について調べた⑪～⑬を見てみよう。⑪「番組の全体的な内容が書かれているか」については先述したが、要約に *a* では表 4 の 1)～5)、*b* では表 5 の 6)～10)が書かれているかどうかが判定の基準となる。

⑪について調べた結果、12 人の要約には番組全体の内容が書かれているものはなかった。12 人の内、*a* では 5)の内容を書いていない学生が 7 人であった。残りの 5 人は 5)を書いていたが 3)を書いていなかった。*b* では 10)の内容を書いていない学生が 6 人であった。10)を書いている学生であっても 7)を書いていなかったり、9)を書いていなかったりした。

表 8 は⑫番組の内容が客観的に示されていない箇所と⑬番組の内容と異なることが書かれている箇所の数を示したものである。それらの例は表 8 の下に示した。

表 8. ⑫番組の内容が客観的に示されていない箇所、  
⑬番組の内容と異なることが書かれている箇所の数

	⑫	⑬
<i>a.</i>	6	5
<i>b.</i>	0	3

⑫番組の内容が客観的に示されていない箇所の例。

(21)聴写を体験して、～～のが難しかった。

(22)実際に視写、聴写を使いメモを取る練習をしてみた。

⑬番組の内容と異なることが書かれている箇所の例。

(23)うまくノートを取るために視写と聴写がある。

(24)～「記録、理解、伝達、表現」を組み合わせるとより相手に分かりやすくメモを取ることができるという。

(21)と(22)は番組の内容が客観的に示されていないものである。(21)では学生の感想が述べられており、(22)では学生がその行為を行った表現になっている。当該学生自身が聴写を体験したわけではないため、(21)は「聴写を体験した 6 人によれば～～が難しかったという」と客観的に示さなければならない。(22)は「～練習が行われた」のように表すと良いだろう。

(23)と(24)は番組の内容と異なることが書かれている。なぜなら、番組では、(23)の「視写と聴写」は、「うまくノートを取るためのもの」ではなく、「ノートを取るための基本」と述べていたからである。(24)についても「記録、理解、伝達、表現」を「組み合わせる」ことで「より相手に分かりやすくメモを取ることができる」とは述べていなかったため番組と異なる。要約に自分の解釈を入れ込んでしまっただけでは要約とは言えない(齋藤 2003) 9)。12 人の要約で⑪番組全体の内容が書かれているものがなかったことから、本学初年次の学生が最も鍛えなければならないのは要約力なのであろうと思われる。

## 5 まとめと今後の課題

本学初年次の学生にとって強化すべき日本語力とはどのようなものなのかを明らかにすることを目的として研究を行った。「基礎ゼミ I」の授業で 12 人の学生が書いた NHK の番組の 2 つの要約を対象として、文章表現に関わる①～⑩と要約力に関わる⑪～⑬の点について調べた。その結果、⑪より 12 人の要約は内容が不十分であることが分かった。すなわち、*a* 「ことば以外の表現」をタイトルとした番組の要約には表 4 の 1)～5)のすべての内容が、*b* 「ことばに変える」をタイトルとした番組の要約には表 5 の 6)～10)のすべての内容が書かれたものがなかったということである。表 6 より①～⑨で最も多かったのは⑧の「表現」であることが分かった。表 7 より半数以上の学生に見られたのは①の「ねじれ」、②の「接続詞」、③の「話し言葉」、⑥の「助詞」、⑦の「省略」、⑨の「不明」であること

が分かった。

これらのことから、本学初年次の学生の鍛えるべき日本語力とは、自分が見た番組や自分が読んだ本の内容を的確に過不足なく要約する力、レポートや論文の文章にふさわしい表現を用いる力なのであらうと考えられた。使用語彙も増やさなければならないであらう。また、主語（主題）の成分と述語の成分がねじれないようにすること、読み手に必要な情報を省略しないことを意識しながら、文と文との関係を的確に示す接続詞を用いる力も養わなければならないであらうと思われた。このような日本語力を、本学初年次の学生が、どのような練習を通して身につけていけば良いのかについては今後の課題とする。

[註]

・註1:「アカデミックスキルズ」は先行研究に共通した用語ではなく、館岡(2002)<sup>8)</sup>のように「アカデミックスキル」と呼んでいるものもある。館岡(2002)の「アカデミックスキル」とは資料収集力、分析力、思考力、批判力、発表力、論文記述力など大学での勉学に必要なスキルを指している。本学の「基礎ゼミ」のシラバスには参考図書として佐藤ほか(2012)が挙げられている。そのため、本研究では「アカデミックスキルズ」を用いている。

[引用文献]

- 1) 石上浩美・中島由佳(編著)(2016)『キャリア・プランニング大学初年次からのキャリアワークブック』ナカニシヤ出版, 21-103
- 2) 柏木隆雄(2016)「大学で学ぶとは」『キャリア・プランニング大学初年次からのキャリアワークブック』ナカニシヤ出版, 1-8
- 3) NHK 高校講座「第5回表現の基礎 ことば以外の表現」  
<https://www.nhk.or.jp/kokokoza/library/tv/kokuhyou/archive/resume005.html> (2018.10.11)

- 4) NHK 高校講座「第2回表現の基礎 ことばに変える」  
<https://www.nhk.or.jp/kokokoza/library/tv/kokuhyou/archive/resume002.html> (2018.10.11)
- 5) 新村出(編)(1976)『広辞苑第六版』岩波書店, 2278
- 6) 齋藤孝(2003)『齋藤孝の実践!日本語ドリル』宝島社, 8-11.62-77
- 7) 佐藤望(編著)ほか(2012)『アカデミック・スキルズ 第2版—大学生のための知的技法入門』慶應義塾大学出版会, 12-13
- 8) 館岡洋子(2002)「日本語でのアカデミック・スキルの養成と自律的学習」『東海大学紀要留学生教育センター』22.東海大学留学生教育センター, 1-20
- 9) 日本語教育学会(編)(1982)『日本語教育事典縮刷版』大修館書店, 308-309
- 10) 野矢茂樹(1997)『哲学教科書シリーズ論理トレーニング』産業図書, 1-23
- 11) 松浦照子(編著)(2017)『実践日本語表現短大生・大学1年生のためのハンドブック』ナカニシヤ出版, 47-69